

〔課題演習抄録〕

自分の考えを言語化できる子どもを育てる指導法の研究
ー取材過程に着目してー

古 賀 可 奈 子

Kanao KOGA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：国語科，作文，書くこと，取材

1 研究の目的

「書けない」「書くことがない」「書く内容が思いつかない」といった子どもを「このことを書こう」「書きたい」というような自分の考えを書くことができる子どもにしたいと思い、この研究を始めた。これまでの研究では、記述、推敲に着目し「書き直し」を行わせることで、子ども自身の書きたいと思っていることを書くことができるようになるのではないかと考えていた。しかし、実際に実践を行うと子ども達から「何を書いたらいいの?」と言われることが多かった。そこで、今回の研究では取材過程に着目し取材中の子どもの様子を記録し取材過程を工夫したら子どもの文章はどう変化するのか、取材過程の重要性について子どものノート及び授業記録を基に明らかにする。

2 研究の計画

2019年11月24、27日に福岡県公立A小学校4年生を対象に「B市農産物紹介を作ろう」で授業実践を行った。

その実践の授業全体及び特に取材活動に焦点を当てた子ども達のやり取りを文字起こしする。また、その際のノートの分析・考察を行う。

3 研究の内容

(1)取材活動Ⅰ(インターネットの利用)

取材活動Ⅰでは、子ども達は、一人一台タブレット端末を使い、自分の紹介する果物の良い所について調べた。インターネットには、たくさんの情報がありB市だけの情報を探すのは難しかったようである。多くの子どもは、調べても読めない漢字がたくさんあり、隣の席の友達に「これ何て

読むか分かる?」と聞くのでスムーズに調べることができないという難しさがあった。その為に、ノートにメモを取るという作業ができずに終わってしまった子どもが多くみられた。

調べた内容について最も多かったのは、品種、時期である。次に多かったのが、人気の種類、糖度が調べられていた。しかし、インターネットを利用しての取材活動では、全国の果物のことを調べている子どもが多く、地域に密着した情報を得ることは難しいことが分かった。

(2)取材活動Ⅱ(インタビュー映像の利用)

取材活動Ⅱでは、グループで質問したいことを出し合い、その質問内容をもとに、教師が取材に行き、子ども達がタブレットを使って取材映像を見るという活動を行った。

取材活動Ⅰでは、メモができていない子が多かったために、改善策として、取材活動Ⅱでは、映像を見る前に表2の26T～28Tのようなやり取りを行った。そうすることで、メモを取ろうという意識が高まり、ほとんどの子どもがメモを取ることができていたのではないかと考える。しかし、なぜメモを取りながら聞くのかを尋ねていないので、自覚できていないかもしれない。

表1 授業記録①

24T	取材に行った時、みんなどうやって聞いていますか。例えば、先生がお店の人でお客さんがAさんでお店に来ました。はい、そしたら?
25C	おいしい時期はいつですか?
26T	おいしい時期はね～。っていいです。そしたらみんなどうやって聞いてる?質問の答えを言ったらどうする?
27C	メモを取る。聞く。
28T	うんうん。そうやって聞いてほしいなと思っています。実際に、みんながお店に行ってインタビューをしていると思って聞いてほしいなと思っています。大丈夫ですか?分かりましたか?
29C	はい。

※教師と子どものやり取りを数字で表している。
Tは教師，Cは子ども。

また，質問事項を班で出し合う時には，どんなことを聞きたいか，いろいろな視点で質問を出すことができていた。その為，どのような答えが返ってくるのかというワクワク感を持ちつつ，取材映像を見ることができていた。また，映像を見る時に助け合いが起きていた。支援役A・進行役B・振り返ることができるような声掛けをする役CとD・見守る役Eというように5人グループの中でそれぞれが役割を担って活動している様子が見られた。支援役Aは，グループのみんながノートにメモを取ることができているか周りを見ながら，声掛けをしている様子が見られた。例えば，Bの「1番目は？」という質問をきっかけに，質問した番号を書いたのか確認したり，糖度が何度か分かるかを確認したりして，何度も支援役Aが教えている様子が窺えた。また，進行役Bは，周りを促す様子が見られた。そして，振り返ることができるような声掛けをするCは「これにも糖度は書いてある」と，取材活動Iの際に調べたノートを開いて発言し，他の資料に目を向けさせようとしていた。Dは，動画を見ながら聞こえてくる回答者の発言を聞きながらノートを指でさすなどしてみんなが振り返ることができるようにしていた。この場面でEは，発言していないが，みんなを静かに見守る様子が見られた。

表2 授業記録②

- | | |
|----|----------------------------------|
| A | 13～14度くらい。 |
| A | それはね，糖度は，どのくらいの甘さかはね，2番目だから。 |
| B | 1番目は？ |
| A | 1番目は，梨，それぞれの食感や味のいいとこ。 |
| C | これにも糖度は書いてある。 |
| B | いくばい。もういい？ |
| A | 番号付けた？ちゃんと？13度～14度くらいって分かる？書いたね？ |
| 全員 | (動画を見る) |
| D | 指でさしながらノートを示す子がいる |
| A | なんて言った？ |
| A | ちょっと待って，ちょっと見せて。 |
| D | 聞かせて。 |

※このグループには，子どもA～Eがいる。

その一方で，ケンカが起きたグループもあった。それは，音声聞こえないからケンカが起きてしまったのだと考えることができる。実際に取材活動に行けばケンカは起きなかっただろうと思った。

実際に現場で取材することと，映像を見るのでは，かなりの違いがあると思う。筆者は，実際に取材に行ったが，映像では読み取ることはできない，その人の苦労や果物を大事に育てていること，人柄等も読み取ることができた。また，直接お話を聞いているので，印象や話の内容が残っている。このように，直接取材をした方が情報量が確実に増えるということが予想できた。質問をすること，人から直接話を聞くことは非常に学ぶ意欲を刺激すると実感した。それは，子どもも同じではないかと筆者自身も思った。だからこそ，実際の現場に行き取材をする方が良かったのではないかと考える。

4 成果と課題

本研究の成果として，質問を考えて取材に行くことで「何を書いたらいいかわからない」と言っていた子どもでも，取材後は「どれを書こうかな」と書きたいことが多くなり「書くこと」ができるようになるということが分かった。さらに，たくさんのことを他者に伝えたいという思いが，子ども達から出ていた。また，グループで質問を考えることで，取材映像を見る時にも1人1役担い，協力して取材をしている様子が見られた。この研究から取材過程は，書くために重要な過程の1つであると分かった。

課題としては，今回の実践で，子どもが実際に現場に行き取材をするということができていないということがある。現場に取材に行く学習を組織し，筆者が経験したことを子ども達にも味わわせたい。また，取材後の作文過程についても研究していきたい。それは，取材したものをそのまま書き写したり，たくさんの内容を選びきれずに長々と書いたりする子どもが出てきたからである。取材後，記述前にどのような組み立てにするのかを考えさせ，伝えたい内容を絞り作文を書くことができるような子どもを育てていきたい。

主な引用・参考文献

- 光村図書 2018 4年下 はばたき
 文部科学省 2017 小学校学習指導要領 国語編
 市毛勝雄・須田実・野口芳宏 1993 表現領域4
 取材・選材のさせ方
 新訂 国語科教育学の基礎 2011 森田信義 二
 表現「(書くこと)」教育の研究